

職人の技

シリーズ②⑦ 〈創作人形師〉

辻村寿三郎 さん



文=岩瀬 大二
text: Daiji Iwase

写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto

1973年からNHK総合テレビで放送が始まった人形劇『新八犬伝』。あのころ、幻想的で、しかしリアルな力強さにあふれた人形劇に胸を躍らせた「子供たち」も、すっかりビジネスの現場で重責を担う立場になった。当時、気鋭の人形師であり、この世界を生み出した辻村寿三郎さんも75歳。この世界の御大として、悠々自適、落ち着いた毎日を過ごされているのではないかと、現在の活動拠点、東京・人形町の『ジユサブロー館』を訪ねると…。

「毎年1月1日の飛行機に乗って、パリに。そこでね、キャバレーを回るんです。ムーラン・ルージュのような素晴らしいところから、治安がすごく悪い地域、それこそ舞台上で1

人しか踊れないような所まで(笑)。今のパリのキャバレーはすごいですよ。夜中の1時、2時から若者が列を作っている。とてもいい刺激を受けて帰ってくるんです」

と、いきなり明るい笑顔であてやかな話題。失礼ながら、堅苦しい大御所のイメージはそこにはない。

「わたし、ラテン系っていわれるんです。自分でもそう思う。だからいろいろ世界を回ったけど、南米だけは行ってない。リオなんて行ったらきつと日本に帰ってこない。だから、皆さんに言ってるんです。わたしがいなくなったら探す所

は分かっているよね、って(笑)」

インタビュアーは辻村さんが創り上げた人形たちが織りなすファンタジックなキャバレーの前で行われたのだが、この夢の世界は、せつなくて、でもとても華やか。時代性、そして幻想と現実を軽く飛び越えてしまう辻村さんの感性による独自の世界。そこには伝統の世界に縛られない「ポップ」

さがあった。「確かに何かに縛られるのは好きではありません。自由に生きていきたい。新しいものを創り上げていきたい。でもね、目新しいだけのものには新しさはない。伝統の中にこ

そ素晴らしい発見がたくさんあるんです」

辻村さんには、伝統の破壊者というイメージもある。子供たちをわくわくさせた新八犬伝にしても、華麗なドレスに身をまとったスーパーモデルのような女性の人形も、そして演劇の世界での刺激的なアート・ディレクション。伝統的な日本の人形師と正反対の道を生き続けてきた感もある。しかし、それも伝統を守っていくための道なのだろう。

「伝統に向き合うと驚きの連続。今、平家物語に取り組んでいます、『こんなことがこんな時代に!』って、案外して仕方がありませんよ」

時代を描いた物語は、時代を経るごとにその時代にふさわしい脚色が施され、書かれた時代が見えなくなってい

くと辻村さんは言う。目新しい解釈は、それはそれで面白いだろう。定番となった脚色を生かすのも良いだろう。でも、辻村さんはその時代に真つすぐ向き合う。積み重なってきたフィクションをはがし、そぎ落とし、その時代の真実を探っていくと、そこに驚きの発見がある。これも伝統を受け継いでいく楽しさ。伝統と歩むのはわくわくすることなのだ。

「戦国時代の武将を人形にするとき、ヘアスタイルを見てください。60年代に流行したサッスーン・カットじゃないですか! (笑)」

辻村さんは、平家物語も

目新しいだけのものには新しさはない。



源氏物語も、歴史書や芸術品ではなく、「いいとこの家の不良少年のポップ・ストーリー」であり「色っぽいパンク小説」であると快活に笑いながら表現する。その時代を生き生きと駆け抜けた人々を人形に表現する。それは時に、伝

統を破壊する行為に見えるかもしれないけれど、実はそれこそ時代を伝えるための努力。なるほど、寿三郎とジュサブローという2つの「ブランド」。辻村さんという職人を表現するために、こちらの文

語が混じってしまう。「昔の人形師が当時に、したかつたけれどできなかつたこと。今の時代だからこそできないことがある。縛られたくはないけれど、でも伝統ついでいものですよ」



PROFILE

つじむら・じゅさぶろう
1933年11月、旧満州、錦州省朝陽生まれ。22歳、前進座の河原崎国太郎氏の紹介で小道具制作の会社に就職。26歳で独立し、幼いころよりの趣味であった創作人形を、生の仕事と決意。1974年NHK総合テレビ「新八大伝」の人形美術を担当し、躍注目を浴びる。その後、数々の創作人形の発表、人形芝居の上演、舞台衣裳のデザインなど、総合的なアーティストとして各方面より大きな注目を集めている。